保守派に食われたゴミ焼場

ついに一年延期へ

大牟田のゴミはどこへ行く

現在大牟田市で八千出す塵埃は日に約二万貫（七〇―七五トン）。だが、健老町にあるゴミ焼場の能力は八千貫から一万貫（三―四トン前後）ほどの老朽物で、とうてい処理しきれず、いまのところ約三分の二は県境の埋立地（船津町の陥没田）に捨てられてきた。

馬鹿をみた市民

当初この敷地選定についてはいろいろと検討されたが帯に短したすきに長しの例えで適当な場所がなかったが、この突堤を検討したところいろいろ条件にもかなうのでここが指定されたもので、県もこれを了諒して無償貸与することになっていた。

反対理由とは

ところがここに地元側から反対運動の手があがり反対署名簿まで作製して市、市議に提出するという動きをみせており、この裏には保守派が立役者となり、この問題を完全に政争の具にしてしまった。ところが地元の中では労働者を主体とする一派は条件づきで設置促進の署名簿を提出しており、地元は完全に二つに分れた結果となってしまった。

反対の理由として、魚市場が近くできるが、塵埃の蝿がそこへ飛んでいって病人や死人がでたらどうする、大牟田港の港としての効力が少くなるなど衛生、港湾などがあげられているが、これに対して市当局ではこんど埋立てられ市が海の方に発展するといわれるが、住宅街は三池、甘木方面になるだろうし、ここは工場地帯になる。塵埃の煙の成分は工場の煙にくらべてもわかるように分析の結果は無害である。また臭気抜きと再燃の装置もし、煙突の高さも四五米にするから地元の衛生面にはさして現在と変りはない。大牟田港の問題も川港だからこれ以上拡張されず効力を損うことはないなど、再三にわたって話合って諒解を求めていたものだった。

政争の具と化す

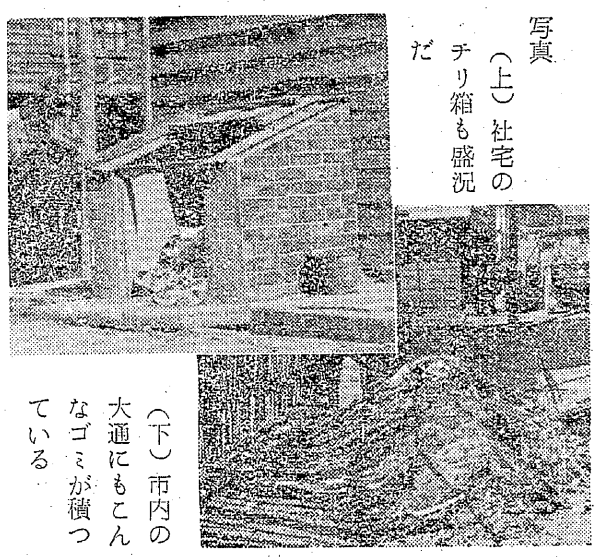
こういう問題をはらんだまま最後の追いこみで、十六日夜七時半から浜田町光円寺で説明会がもたれ出席者は市側より市長、助役、建設部長、衛生部長、経済部長、計画課長、清掃課長など市民側は地元の中友、大正校区の約二百人であったが、質問に入るや建設反対の立役者山本松次郎（愛市連盟事務局長）ら一派が市長の言葉尻をとらえて同じような質問ばかり繰返し長々としゃべるというクダリもあった。

直接の地元は中友校区なのに反対署名は大正校区の方が多かったという珍現象もあり、あきらかに政争の具化していることは明りようであった。

十九日の大牟田市議会全員協議会で最後の断を下すことになったが全員協議会を前に開いた教育民生委では四対三という設置に反対が飛び出しており、全員協議会では夜までもみつづけ、結局保守派の目論んだ反対ということがとられ一年延期、来年度着工ということに決定した。

この一年延期には新場所をあらたに検討するという一項まで加えられ、問題は全くふりだしにもどってしまったのである。

ところが埋立地に捨てている地元では、地続きの原万田地区から蠅臭気に困るということで以前から苦情が持込まれており、瑞尾市長から正式に十九日細谷市長に強硬な申入れまできている始末である市民にとって一番大切な衛生環境とくに塵埃を処理する施設さえできないというのは、憤りをこえて悲劇でもあり、こんどの市政に大きな影響を与えるものと思われている。



写真（上）社宅のチリ箱も盛況だ

（下）市内の大通にもこんなゴミが積っている

一年延長を申入れ

暫定として共済制度で

昨年二月の中央委員会で決定した傷病手当金の給付一年延長は結核患者をふくめて、組合員、家族に大きな喜びをあたえ、一日もはやくその実現が望まれていたが、諸種の事情や健保の赤字などが大きな障碍となって実現をはばまれていたが、組合ではあらたな構想の下に早期実現へとのり出し、去る二十日会社あてにつぎのような申入れを行った。

申入書

結核患者の傷病手当金については御承知の通り、現在は三井三池健康保険組合の附加給は六カ月を併せて二カ年間支給されておりますが、過去の事例ならびに患者の体験によりましても二カ年の療養では就業可能の段階にいたらず、むしろ生活のために病身をおして出勤し、或いは給付期間不足のために手術も思い止まらざるを得ない事情にあります。

この間の消息については貴方においても種々御検討のことと存じますが、当方におきましても一時も早くこの対策を講ずべく検討の結果、つぎの通り成案をみましたので本主旨を提案し貴方の同意を得たく申入れ致します。

記

一、延長傷病手当金の給付期間をさらに一年延長し三カ年とする

二、延長に要する財源は現行健康保険料の徴収比率にしたがって事業主並びに被保険者が負担する。

三、右実施に当っては三井三池健康保険経済の実情等を勘案し、本予算において計上するまでの暫定措置として一応健保とは別に共済制度とする。

この申込れにしたがいこんど早期実現のため交渉がつづけられることになっている。

犠牲者既に六人

悲しい基地の表情

相馬ガ原事件をさぐる

米兵による日本人婦人射殺事件という悲しい出来事はなぜ起ったのか。地元は何を考えているのか。相馬ガ原事件その後の表情をさぐるため、記者はジープを駆って現地の村々をたずねたが、自ら放った火の手の拡がりに、いきどおり悲しみ切っているというのが、相馬村の偽らぬ姿のようであった。

この群馬県相馬ガ原演習場は、利根川を挟んで赤城山と対するはる名山麓に、六百八十六万坪を占めている旧日本軍演習地である。そのうち三百九十万坪の民有地は、昭和二十一年四月、米軍によって接収され、坪当り五十七銭という雀の涙ほどの補償金が一回払われただけである。しかも一戸当り平均耕作面積六―八反、標高四百―五百米の火山灰地では、肥料は倍かかって反収は平坦地の半分。現金収入のない農家にとって、一日拾って二百―三百円、うまくゆけば千円―二千円という〝弾拾い〟がどんなに魅力だったか想像されよう。弾拾い専門で家計をたてるか、副業程度かはともかくとして相馬村七百戸のほとんどが〝弾拾い〟で生活していたようだ。拾われた弾は鉄（砲弾の破片、小銃弾）で貫七十―八十円、真ちゅう（薬きょう）が七百円で故買商に買取られてゆくが、それには弾着地附近にタコつぼを掘ってひそむといった危険までおかされていた。

一時は米兵が突撃するあとから、むらがり寄った日本人が、まだ焼けている薬きょうを手袋をはめて奪い合うという姿も見られた。「実際、いままで事故が起らなかったのが不思議ですよ」という村人もいるが、米軍の軍紀も相当緩んでいたようだ。現に記者がたずねた時も、期限の切れた発煙筒と手りゅう弾を処理する米兵のまわりを、十数名の日本人がとりまいていた。故買のボス氏は「こうやって私が米軍に渡りをつけているんで、事故が起らないんですよ」と言い、タバコをねだられた米軍隊長は愛想良くライターをつけていたが、一人の老人は「どうせ金をにぎらしたんだべ」と言っていたさて、村に帰って関係者の意見を聞いてみよう。殺された坂井なかさん（46）の夫である相馬村村議坂井秋吉さん（48）は「私からは何も申上げない方が良いのではないか」と言うが、この柏木沢部落ではどこえ行っても多くを語ろうとしない。余り問題が大きくなり過ぎて「厳重立入り禁止」にでもなったら〝弾拾い〟ができなくなってしまう心配があるからだ。村役場でも詳しいことは発表を差控えているが、驚いたことに既に六人がこの演習場で死んでいる。怪我人は多数で、その数もつかめない。坂井さんの場合は「〝流弾〟では余り気の毒だ」と村人が動き出したが、なかさんの殺された二週間前の一月十七日、桃井村の松岡建さん（34）は奥山に薪を取りに行き、一〇五ミリ、りゅう弾砲に当って即死している。六つを頭に三人の子供をかかえた妻のふじさん（28）は「これからどうしたらいいのか」と訴えているが、補償金は米軍から届けられた僅か二万円だけだった。去年の春も同村の故買商金井さん親子が不発弾の爆発で二人いっしょに死んでいる また三年前に死んだ蜂巣牛男君（当時16才）の場合は、もう一押しすれば補償がとれるところまで行ったが、父親の村議は「それで皆が弾拾いに行けなくなっては困るから」と補償請求を断念してしまった。それほど〝弾拾い〟のためには犠牲を払っていた訳である。だから村で闘いた声も「ともかくこのまま弾拾いを続けさせてくれ」といった意見が一番多いようだそのためには自主的に「弾拾い組合」を作って危険のないようにするとまで言っている。だが、もう一つの意見を代表して桃井村の鎌田忠雄さん（34）はこう言っている。「わしは山を持っているが安心して薪もとりに行けない。余りにも赤線地域が広すぎる。演習場内の採草も自由にさせてほしい。そうすれば堆肥も作り、増収もできる」同じような意見は一枚十円の炭俵あみを副業にしている人たちからも聞いた。材料のカヤを刈りに入れるのは、今は演習のない日曜日だけなのだ。最後にもう一つの意見、これは皆の声かも知れない。「演習地の作ってないところを耕作させてもらいたい」という要求である。そして心の片隅では〝演習場さえなければ〟とつぶやいている。だが、それは出来ないものとあきらめている。それが現在の相馬の実情である。

（機関紙通信）

なおこの相馬ガ原事件の主任弁護士として坂本泰良氏（熊本）が活躍している。

× ×

歸國船を迎える

舞鶴でみる平和の夢

〝死の行軍〟で一躍自衛隊の軍事訓練面が白日にさらされ、ようやく忘れかけた旧軍隊の一コマがまた手繰りよせられたような錯覚さえ起させている。中古エンジン、ジェット機部品、破れ軍靴とつぎつぎと世論の非難を浴びながらも着々と自衛隊は、戦場への道を邁進している。この道はいつか来た道である。

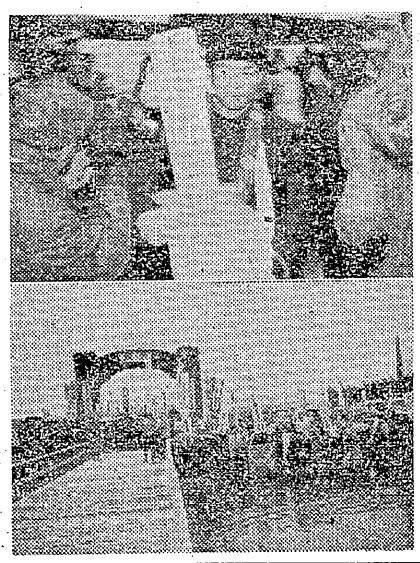
こういうとき日ソ交渉妥結による最後の抑留者が昨年十二月末に夢にまでみた故郷へと上陸した。戦争の残骸は十年後の今日でもまだ残っているのに、なぜこの道へ自衛隊は引返そうとしているのだろうか。以下は帰国船を迎えるため熊本県代表として舞鶴に出向いた県議酒井誉為氏（政治局員）の手記である。

× ×

降りしきる雪を頭に、肩にそして身体一面真白になりながらも誰れかを待ち詫びる人は氷りつく桟橋に一点を凝視しながら独り佇む。これが日ソ交渉妥結により集団引揚げを約束された人たちの家族が今までの苦労をこの日に秘めて、ここ舞鶴に集って来た姿である。

一九五六年もおし詰った十二月二十六日、千二百名の同胞を乗せた興安丸はソ連地区ナホトカを第一船よりは、白木の位牌もいたいたしく、遺骨が上陸、なみいる家族の嗚咽の中をしゆくしゆくと進んで行く、ついで患者、元気な人々の順で桟橋を上って来る。

「父ちゃん」と涙を一杯貯めた顔をクシャクシャにしてすがりつく家族、物も云えず唯しっかりと抱きつく親子、あゝこの日を異国の土にあつた人達が幾度胸に描いたことだろう。そしてまた家の大黒柱なき後、一家を支えて来た奥さんたち、夢にまで描いた祖国をただひたすらに恋い焦れながら哀れ異国の土になつた人を迎えなければならなかつた家族の人たち、脚下を没する雪も、寒さもすべてを忘れた舞鶴桟橋引揚者出迎えの一瞬は唯感激と興奮の場面であつた熊本県引揚者三十二名は無事その後、帰熊することができ各駅での歓迎をうけ家路についたのである



（上）位牌を持つて上陸する抑留者（下）ノボリを立てた歓迎の家族たち

▲みんなが云いたい事をみんなが聞くべきだ▲一口が一生を明るくする▲天性は苦労の中から

会社貯金は賃上げの邪魔になるか

一、私達は病気、死などの無情や、出産、結婚、成長の喜びにとりまかれています。そんな喜びや悲しみに出合ってまづ頭に浮ぶのは金です。

組合の共済会の利用もありますが、組合から借っても利子のつく借金です。

会社は組合員一人当り二万円の貯金があるといっているそうですが、現今二万円位の手持ちがなくては世帯の円滑な運営はできません。

そしてその二万円の貯金にしたところが、組合員一人一人が行きたい映画をやめるとか、着たい洋服も作らないとか、単価制でくたくたになるまで寿命を縮めて働いた血と汗のたまものなのです。

組合員一人当り二万円の貯金があるのは、組合員が食っていける証拠だと会社は云うでしょう。

しかし食うだけの生活なら、二十世紀後半の文明社会においては人間の生活と云えるものではありません。

もし一歩借金のふちにおちいるなら（それが一万円でも）町の金融ゴロに骨身をむしばまれる例は私達が日常身近に見聞するところです。

そしてその組合員の借金は人当り二万円近くあるのです。どうか組合幹部のみなさん団交の席上で「組合員一人当り二万円の貯金は貯えというよりも、生活の予備金といったものだ。しかもそれが組合員の辛抱の上に築いたものであつて、会社は組合員の労苦すら会社の利潤向上のため利用するものだ」と論破して下さい。そして組合員が借金のふちにおちいらぬよう、苦しい中でも不時の用意を常常するよう主張して下さい。

二、さて会社預金か労金かの問題があります。私は労金に預けたがよいと思います。

組合員は会社の利子が多いので会社にあづけるのです。

組合は「労金を育てることが組合の闘争時や、組合員の相互扶助に、力になる」ことを一人々々の組合員に説得していただきたい。この説得が組織づくりの一環だと思います。

三、おわりに、組合員同志で「組合員の会社貯金が賃上げの邪魔になる」ということはやめて下さい。そんなことをいうと、組合員の中で、会社に貯金している人と貯金をしていない人とのあいだに感情が対立して、組合の統一と団結にひびが入るからです。

三川支部　池田　昭二

寒い精密検査場

私は去る十三日精密検査を受けに行き感じた事を記してみたい検査場は元入秒診察室になっていたが、待合所には蒸気が一カ所（一カ所破損）だけ申訳に通っていた当日検査に来た要注意者は皆「これでは病気を治す所か却って風邪を引いてしまう」と皆ブツブツ云っている。レントゲン室等、裸身になるのに蒸気は一本も通っていないまつたくこれではたまつたものではない、たゞでさえ丈夫でない身体の要注意者達がレントゲンの診察に裸身になり、又三、四時間寒い待合所に待たされるのであるが、病院当局や関係担当者は他の病室や診察室や待合所同様に暖くしてもらいたいものである。

三川支部　藤木繁